

【報告】

第16回 日本禁煙科学会 学術総会 in 倉敷

【開催概要】

◆テーマ

侃侃諤諤 禁煙科学

◆開催日

開催日：2021年9月11日（土）・12日（日） WEB開催

◆会長

種本 和雄（川崎医科大学 心臓血管外科学 教授）

◆主催

日本禁煙科学会、川崎医科大学

◆主たるプログラム

会長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、分科会、一般演題

【URL】

◆第16回 日本禁煙科学会 学術総会のページ

https://www.jascs.jp/scientific_conference/conf_index.php#area_16

◆第16回 日本禁煙科学会 学術総会 プログラム・抄録集

「禁煙科学」Vol.15(13),2021/09

※「禁煙科学2021」のページからダウンロードして下さい。

https://www.jascs.jp/kinen_kagaku/kinen_kagaku_2021.html

【学術総会会長挨拶】

第16回日本禁煙科学会学術総会in倉敷 会長

種本 和雄 川崎医科大学 心臓血管外科学 教授

2021年9月11日～12日に完全WEBの形で、第16回日本禁煙科学会学術総会in倉敷を開催させていただきます。禁煙に関する活動も、加熱式タバコなど新しいジャンルのもも加わってきて、影響に関する研究とともにますます重要になってきております。特に次世代を担う未成年者や若者の禁煙教育が、まさしく将来の我が国の喫煙率低下に直接的に寄与する大事なアクションであると思っております。2020年4月の改正健康増進法の施行で、まだまだ不完全といえ日本でも受動喫煙対策義務化がスタートしました。1年でどう変わったか、今後どうしていけばいいのか、皆様と将来をにらんだ禁煙科学について語り合えればと思っております。本来は皆さまを倉敷にお迎えして、歴史と文化の街を堪能していただきながら、禁煙科学について議論するつもりでございました。しかし、新型コロナウイルス蔓延状況から判断し、誠に残念ながら完全WEBでの開催に変更させていただきます。WEB学会も回を重ねて多くのノウハウが蓄積され、問題なく全国学会を開催できるレベルになっております。また、日常の臨床の場にありながら時間の許すときに学会に参加することも可能となり、これはWEB学会ならではのメリットでもあります。WEB学会となりますと、ランチョンセミナーなどで皆様お楽しみのお弁当を提供することが出来ません。その代わりにセミナーにご参加いただいた有料入場者の方々にはお楽しみ企画をご用意しておりますので、是非とも奮ってご参加ください。新型コロナウイルス蔓延状況が未だ好転しない毎日ですが、学術総会では少しでも明るい気分で禁煙科学について「侃侃諤諤」と議論できることを楽しみにしております。多くの皆様のご参加を期待しております。

【学 会 賞】



◇第16回日本禁煙科学会学術総会in倉敷 学会賞受賞者

清水 信義 氏 (岡山県医師会 副会長/岡山大学 名誉教授)

◇受賞理由：

日本の禁煙の黎明期から外科医としての立場から禁煙の重要性を説いて大きな影響を与えた。

【研修・職歴】

昭和15年5月18日 岡山県高梁市成羽町生れ

昭和34年3月 岡山県立岡山朝日高等学校 卒業

昭和41年3月 岡山大学医学部 卒業

昭和42年4月 岡山大学 第二外科 入局

平成 5年4月 岡山大学医学部 外科学第二講座 教授

平成13年4月 岡山大学大学院 腫瘍・胸部外科 教授

平成14年4月 岡山大学医学部附属病院 院長

平成17年6月 国立大学法人岡山大学 理事・副学長

平成20年4月 独立行政法人労働者健康福祉機構岡山労災病院 病院長、岡山大学 名誉教授

平成23年4月～現在 岡山県医師会 副会長

平成26年4月 独立行政法人労働者健康福祉機構岡山労災病院 名誉病院長

平成26年4月 一般社団法人積善会 理事長

平成29年7月 一般財団法人淳風会 理事、医療診療セクター長

令和3年6月～現在 一般財団法人淳風会 特別顧問

国内学会：日本外科学会 特別功労会員

日本内視鏡外科学会 名誉会長 第16回総会会長 (平成15年)

日本移植学会 名誉会員 第40回総会会長 (平成16年)

日本胸部外科学会 名誉会長 第58回学術集会会長 (平成17年)

日本呼吸器外科学会 特別会員

国際学会：米国胸部外科学会 (STS) 国際会員

専門分野：呼吸器外科

受賞歴：第59回山陽新聞賞学術功労賞 平成13年1月3日

表彰状 岡山県警察本部長表彰 平成14年3月31日

感謝状 厚生労働大臣感謝状 平成16年8月

平成19年度日本対がん協会賞 平成19年9月13日

平成21年度岡山県三木記念賞社会部門 平成21年9月1日

叙勲 瑞宝小綬章 令和元年5月24日

〈岡山県受動喫煙防止条例制定の経緯〉

○清水 信義、藤本 政明、合地 明、佐藤 正浩、内田 耕三郎、神崎 寛子、
大原 利憲、松山 正春 岡山県医師会

コロナ禍でのオリンピック・パラリンピックの開催となったがオリンピックはタバコフリーということでその開催に合わせて、国が健康増進法を改正し、原則飲食店での喫煙を制限した法律の施行されている。国は健康増進法の改正を行い、2019年1月よりは学校・病院・児童福祉施設等、行政機関の敷地内禁煙を禁止した（喫煙場所設置は可）。また飲食店についても2020年4月1日からは原則屋内禁煙としたが、喫煙専用室での喫煙は可とした床面積100平方メートル以下の飲食店が原則屋内禁煙だが標識すれば喫煙可とした。諸外国に比べかなり制限の緩い法律であり、大会開催都市の東京都は国の法律より厳格な条例を制定し、小規模でも従業員のいる飲食店を全面禁煙とした。その後全国の自治体でも、受動喫煙防止条例の制定が進み、岡山県でも、県医師会を中心に受動喫煙防止の活動を開始し、2019年5月には岡山県受動喫煙防止条例の制定を求め県民総決起大会を開催した。また、同時に署名運動を進め、3万6千筆の署名を集め、岡山県知事に条例制定の要請を行った。その結果、2020年3月24日に岡山県は県受動喫煙防止条例を制定した。この条例は、2020年4月1日制定され、実際の実施は同年10月1日からとなった。

岡山県条例では管理権原者は、既存特定飲食提供施設で従業員が使用されている場合においては、当該既存特定飲食提供施設の屋内の場所の全部の場所を喫煙可能室としないよう努めなければならないとされています。

オリンピック・パラリンピックの開催で条例の遵守の状況が浮かび上がるかと期待したが、状況は全く一変した。コロナ禍での飲食店の窮状は相当なものであり、現状では受動喫煙防止条例の実効性を問える状況にない。コロナ感染収束後に向けて、受動喫煙防止に向けて国の法律・県条例の周知活動を推進し、コロナ拡散防止とともに受動喫煙防止の活動を進めていきたい。

【日本禁煙科学会 禁煙教育推進賞（畑中孝之賞）】

日本禁煙科学会 禁煙教育推進賞について

日本禁煙科学会は、2006年の発足当初から子どもたちをタバコの害から守るための教育の普及につとめてきましたが、2021年より日本の禁煙の一層の推進と今後の活動における協働に資することを目的として、禁煙教育の禁煙教育の領域において多大な功績をあげた個人または団体を顕彰ことと致しました。なお、なお本賞は副称を「畑中孝之賞」とします。

日本禁煙科学会HP「畑中孝之氏について」 ---下記URLよりご覧ください。

https://www.jascs.jp/topix/topix_202109/mr_hatanaka.html

◇第16回日本禁煙科学会学術総会 in 倉敷 禁煙教育推進賞受賞団体

和歌山禁煙教育ボランティアの会

たばこ問題を考える会・和歌山

和歌山県教育委員会

和歌山市教育委員会 代表：西畑 昌治（和歌山禁煙教育ボランティアの会）

◇受賞理由：

2002年4月に日本で初めて都道府県単位での学校敷地内禁煙を実施し、以後も4団体が協力しつつ、学校禁煙化の徹底や子どもたちへの禁煙教育を実施し「和歌山モデル」として日本の禁煙をリードしてきた。

受賞に当たってのメッセージ

和歌山県教育委員会教育長 宮崎 泉

この度は、日本禁煙科学会禁煙教育推進賞（畑中孝之賞）の創設に当たり、栄えある受賞の連絡をいただき、ありがとうございます。

平成13年3月に和歌山県が策定した「和歌山県たばこ対策指針」において、小学校低学年からの禁煙教育や未成年者をたばこから遠ざけるために学校敷地内を禁煙とすることが示されました。

それを受け、和歌山県教育委員会では、平成14年度から、公立学校において校内敷地内禁煙を行い、児童生徒を含む非喫煙者の受動喫煙による健康被害を防止する取組を進めてまいりました。

本県のこのような取組を評価していただき、畑中孝之氏が熱心に活動された「和歌山禁煙教育ボランティアの会」や「たばこ問題を考える会・和歌山」とともに受賞できることは誠に光栄に存じます。

健康増進法が一部改正され、喫煙による影響をできる限り低減する取組の推進が言われている中で、禁煙教育等を通して、本県の児童生徒が、生涯にわたって健康に過ごせるよう、今後とも関係機関等と連携を図り健康教育を充実していく所存です。

日本禁煙科学会 禁煙教育推進賞受賞（畑中孝之賞）受賞に際しまして

和歌山禁煙教育ボランティアの会 代表 西畑 昌治

「和歌山県教育委員会」「和歌山市教育委員会」「たばこ問題を考える会・和歌山」「和歌山禁煙教育ボランティアの会」の4者に第1回禁煙教育推進賞（畑中孝之賞）が授与されましたことを感謝申し上げます。故・畑中孝之さんも大変お喜びのことと思います。

和歌山県では、2001年に当時としては画期的な「和歌山県タバコ対策指針」が制定され、2002年には、和歌山県教育委

員会が全国で初めて公立学校敷地内禁煙を決定しました。当時は「教員の精神疾患が増える」などの意見もありましたが、この和歌山県教育委員会の決定が発端となり、現在では全国の公立学校は禁煙となっています。

喫煙防止教育においても、和歌山県教育委員会はPPTはじめさまざまな教育ツールを提供されました。さらに和歌山市教育委員会も、和歌山禁煙教育ボランティアの会の活動を長年にわたり支え続けるなど、喫煙防止教育に力を注いでおられます。

「たばこ問題を考える会・和歌山」は1987年（62年）から、タバコの害を広く市民に啓発すべく毎年、世界禁煙デーに合わせて、街頭活動とタバコ問題の講演会を継続・開催し、2002年の公立学校敷地内禁煙化の決定の際には「たばこ問題を考える会・和歌山」のメンバーを軸に広く有識者が集まり、和歌山県や和歌山県教育委員会の活動を支える役割を果たしてきました。

公立学校敷地内禁煙化の動きの中で、子どもたちに喫煙防止教育を提供すべく和歌山市医師会にて喫煙防止授業への参加を募集したところ、6名の医師の応募があり、2003年には「和歌山禁煙教育ボランティアの会」が結成されました。今では医師・歯科医師・薬剤師など医療者のほか、故畑中孝之氏のように市民も交え、和歌山市内すべての小学校や那賀地方、海南地方、日高地方、紀南地方においても毎年喫煙防止授業を提供しています。

行政と地元の団体が一体となって禁煙にとりくむ和歌山の動きは、2002年当時の和歌山県教育委員会委員長の小関氏によって「和歌山モデル」と命名され、日本の禁煙を導くモデルとなりました。

この間、日本禁煙科学会の高橋裕子会長には折に触れ励ましのお言葉を頂いてきました。今回、「和歌山モデル」の中軸となった4団体が第一回畑中賞を受賞させていただきましたことで、今後ともさらに連携を強め、子どもたちのために一層の活動をおこなってゆく励みといたします。

【報告】

第16回日本禁煙科学会学術総会
教育・小児科分科会 報告

教育・小児科分科会

牟田 広実、野田 隆、黒沢 和夫、鈴木 修一

野田から、総論として、受動喫煙は従来からあるSecond-hand smokeに加えて、Third-hand smokeの概念が確立してきたこと、またここ10数年間で発表された数々の研究結果から、受動喫煙にここまでは大丈夫と許容されるレベルはないことを示しました。続いて、自治体と協働して受動喫煙調査について報告しました。

黒沢からは、熊谷市での小学4年生における調査結果を発表しました。アンケートでは家庭内喫煙の割合は減少しているにもかかわらず、一昨年までは減少していた尿中コチニンが感度以下の児童の割合はここ2年増加傾向にあること、児童の睡眠時間不足や電子機器利用時間延長が尿中コチニン濃度上昇と関連することを報告しました。

鈴木からは、千葉県千葉市と四街道市の中学生のうち、家庭内に喫煙者がいる生徒について、中学1年、3年の質問票回答と尿コチニン値追跡測定の結果を報告しました。尿中コチニン値は全体としては変化がないが低下・増加のグループが存在し、受動喫煙防止条例やパンデミックが、それぞれ追い風・逆風となった可能性があると考えました。

牟田からは、本年3月より自院で開始した3歳児健診を利用した受動喫煙調査についての経過報告をしました。受診児の父の喫煙率が34.5%、母が10.6%、家族内に1人でも喫煙者がいる割合は40.7%でした。紙巻きタバコと加熱式タバコの割合はほぼ同じで、喫煙場所では台所、ベランダが多くなっていました。家庭内喫煙者の有無と、受動喫煙と関連があると言われている種々の疾患との関連は明らかではありませんでした。

総合討論では、加熱式タバコによる受動喫煙がある児の尿中コチニン濃度は、紙巻きタバコの児のそれと比べると低い傾向にあることが追加されました。その原因として、紙巻きタバコからの煙には油性成分もあるのに対し、加熱式タバコは水性の物質がメインであり粒子径が大きく、拡散しづらいからではないかという推察がありました。

最後に禁煙支援の喜びの声を参加者からいただき、牟田からまとめとして、受動喫煙検診でその実態を明らかにするだけでなく、個々人に結果を返すことで、家族を禁煙に導くことが目標であることを確認しました。

非喫煙者である子どもたちに喫煙防止教育を行うとともに、「受動喫煙ゼロ」の環境を整備し、「最初の一本を吸わせない」につなげる、喫煙者に対して禁煙に向け「早く最後の一本を吸わせる」ことが本分科会の目的であると考えています。ご参加のみなさま、ありがとうございました。

【報告】

第16回日本禁煙科学会学術総会
行動科学分科会 報告

行動科学分科会 東山 明子

今回の学術総会では健康科学分科会は第1会場にて16時から1時間、シンポジウム1「トップアスリートと喫煙」を行いました。参加者数はzoom参加者数では登壇者も含めて66名でした。

登壇者は、座長の東山明子（健康分科会リーダー、大阪商業大学）とシンポジスト2名として森本達也氏（静岡県立大学）と横山喬之氏（摂南大学、非会員）の3名による鼎談でした。

最初に東山から、トップアスリートの喫煙の問題点と改善策を検討し、アスリートの喫煙を無くすためにできることは何かを考える、というシンポジウムの趣旨説明が行われ、さらにアスリート大学生たちの喫煙意識調査結果から、喫煙しないアスリート学生であっても、喫煙が精神安定に貢献するという誤解があることが示されました。

次いで森本氏から、医学的見地に基づいて、喫煙による運動能力低下、呼吸機能低下、筋力や瞬発力の低下、食欲低下などの問題について動脈血濃度低下データ等を示しながらの詳細な解説がなされました。

続いて横山氏からは、自己紹介として東京オリンピック柔道競技の会場で披露された柔道形演武「投げの形」の映像を短縮したものが説明を加えながら紹介され、競技場面はトップアスリートであっても非常に緊張して心臓の鼓動が早く強くなること等が話されました。

全体討議では、トップアスリートの喫煙実態について、柔道代表選手の中にも喫煙者は存在し、メダリストにも喫煙者がいること、など残念な情報が出てきました。柔道は1本を取れば勝負が決まる競技であるので、非常に短時間で試合終了となることが多く、そのために喫煙者が禁煙の必要を感じない可能性があること、しかし、延長戦（ゴールデンスコア）になると喫煙する選手にとっては苦戦となることが分かりました。柔道競技は短時間で終わらせることができるという特性から、連覇する喫煙選手も存在するけれども、一般的に喫煙アスリートは連覇が続きにくいことや選手生命が短いこと、ケガがしやすく治癒に時間がかかることなどが話し合われました。なお、柔道形競技はすべての形を右と左の両方行うために競技時間が長く、また一挙一動が評価されるために動きに全神経を集中すること、技を書ける側と受ける側の2人の呼吸を合わせる事が重要であること等から、喫煙者がトップにあがるのは困難であることが分かりました。日本柔道連盟では「柔道MINDプロジェクト」として、Mマナー、I自立、N高潔、D品格の教育が推進されているとのことでした。

トップアスリートの喫煙は、スポーツは「紳士的である」というイメージを崩壊されるものであり、良いモデルとしてのアスリートを育て、これからの子どもたちを導くためには、これらのMIND意識を高め、浸透させていくことが、スポーツ界全体にとって重要であり、スポーツの意義はそこにあると考えられます。スポーツを通して自立した高潔で品格のある人間を育てることが重要であると認識するシンポジウムとなりました。

参加していただきましたみなさま、ありがとうございました。